韓国の大学における歴史素材を活用した日本文化講義の意義

鈴木啓孝*
rotas_1977@hotmail.com

<目次>

1. はじめに
2. 誰に講義するのか？
—履修学生及び教室の概要—
3. 講義の実践
3.1 講義計画と講義目標
3.2 講義内容1—「江戸から明治」—
3.3 講義内容2—「新聞の誕生」—
3.4 講義内容3—「国語という思想」—
4. 学生の反応
4.1 講義の効用
4.2 講義の理念
4.3 中間テスト答案例
5. おわりに

主題語: 浮世絵(Ukiyoe), 木版印刷(woodblock printing), メディア史(the history of media), 歴史認識(recognition of history), メディアを活用した講義(the lecture using media)

1. はじめに

本稿は、2011・2012年度の第1学期に東義大学校人文大学日語日文学科で開講された「メディア日本社会論」という講義[1)]の実践を基にした一試論である。

国際化の進む今日、日本語を第2言語として学ぶ外国人日本語学習者を対象とした日本語教育の現場においては、単なる日本語コミュニケーション能力の育成にとどまらない、全人的な、ホーリスティックな立場からの人材育成の必要が提言されている(細川2011)。日本語教育学分野では、このような認識に基づいた日本文化教育の実践報告が奨励されてお

* 東義大学校 人文大学 日語日文学科 助教授、近代日本思想史専攻

1) この講義は、原則、同大同学科の学部3年生を対象とした専門教育科目であるが、他専攻の学生も毎年若干名聴講に訪れる。講義計画書において、「ネイティブの日本語話者である日本人講師が日本語で講義する」ことが事前告知されているため、聴講学生に対して、講義を聴きとれるだけの日本語ヒアリング能力が求められていたところに特色がある。また、その日本人講師が日本語教育学の専門家ではなく、本講義が狭義の意味での「日本語」科目ではない点も大きな特徴といえる。

り、その蓄積も進みつつあるという。であるのならば、国際交流と同時に学際交流が進む今日においては、狭義の日本語教育学分野以外の学識を活用した教室運営の実践が、なるべく広い分野から、なるべく数多く試みられてよいはずである。

そのような実践の一例として、以下、韓国の大学における日本文化講義への歴史学分野(近代日本思想史)の導入例を紹介してみようと思う。またその際、実際に日本で生活している外国人留学生を対象に日本国内の大学で講義する場面とは違った注意点があることを随時確認してゆく。その上で、「韓国の大学」という特殊な教育現場で、日本人の講師が「日本の歴史」を語ることの可能性と意義について考察を加えてみる。なお、本講義においては、いわゆる「教科書の歴史」で重視される政治史ではなく、軽視されがちな文化史の素材を用いたアプローチを行っていることをあらかじめ断っておく。

2. 誰に講義するのか？　―履修学生及び教室の概要―

前述の通り、本稿は日本文化の関連講義[2)]についての考察をおこなうものであるが、ここでいう「日本文化関連講義」とは、日本国内の大学における留学生を対象とした日本語教育の現場でみると「日本事情」という名称で開講されている場合が多いものである。

日本事情という教科のあり方については、専門の日本語講師が担当するべきなのか、それとも、歴史や経済、あるいは異文化コミュニケーションなど別の専門分野の講師が担当すべきなのかの結論が出ておらず、担当者によって様々な意見が出てくる状況にあった(細川1999)。その現状に未だ大きな変化はないようであるが、こうした問題の存在が浮き彫りとなるにつれて、近年では、日本事情教育についての議論が活発になされるように変化してきており、新しい視点や新しい教材の必要性が訴えられている(水内・李2006)。

留学生に対する日本文化教育に携わる多くの論者に共通しているのは、①「日本文化に限らず、文化は固定的ではなく流動的だという前提認識」であり、また、②「日本についてのステレオタイプや既成概念にとらわれずに、日本とは何かということについて冷静かつ柔軟に考えることのできる学生を養成したいという目的意識」である。そして、その目的を達

2) 筆者の勤務先である東義大日語日文学科には、「日本語学」「日本文学」「日本文化」の3コースが設置されており、専任教員及び講義科目もこの3つのコースに均等に配分されている。このように、日本国外の大学における日本語・日本文化専門教育の現場では、狭義の日本語関連科目以外に、日本文学関連科目と並んで日本文化関連科目が複数設置されるケースがある。

成するための「方法論」に関して、③「講師が自己の知識を一方的に伝達する講義スタイルではなく、学生主体の活動に重きをおいた教室運営がなされるべきだ」という理解が広く共感を集めているといえるだろう[3)]。

だが、以上にみた3つの共通理解を踏まえて、いざ韓国の大学における日本文化関連科目の講義に臨んでみると、その場で大きな戸惑いに直面することになるはずだ。

聴講のために集まった学生たちを概観してみよう。すると、まず、自らの日本留学・就労体験や、日本人の友人との交友経験に基づいて、たとえ数十人を前にしても日本文化に関する持論を日本語で堂々と主張できる学生が数名ほど参席している。一方、日本語学習に対する熱意はあるものの、日本滞在経験がなく、具体的に日本文化を体験したことがないため、数十人を前にして日本語で持論を述べる勇気なんてとても出ないという学生が大多数である。さらには、成績不良などが原因ですでに日本語学習の意欲を失っているが、卒業単位取得のため仕方なく出席しなければならない学生も若干名加わっている──と、このような状況が眼前に広がる。すなわち、1クラス当りの履修学生が大勢であり、しかも履修学生間の個人差(ex日本体験の有無 / 日本語能力の高低 / 性格の積極性・消極性 / 学習意欲の有無)が激しいため、学生個々の意見開陳を促し、それに依拠するような教室運営では、効果的な学習が困難なケースがあるということである[4)]。

最終的に、2011年度第1学期「メディア日本社会論」の講義(定員45名：毎週3時間×15週)には、昼間クラス42名(内日本滞在経験者11名、他専攻学生4名)、夜間クラス45名(内日本滞在経験者6名、他専攻学生1名)、2012年度第1学期(定員70名)には、昼間クラス59名(内日本滞在経験者9名、他専攻学生5名)、夜間クラス37名(内日本滞在経験者11名、他専攻学生2名)の学生による受講申請があった[5)]。やはり、履修学生数が多く、また日本経験や日本語能力

---

3) そのような「学生主体の日本事情教育」の実践例として、佐藤(1996)を参照。佐藤勢紀子氏は日本思想史研究者であるが、日本の大学で留学生教育に携わる中で、これまで「学生主体」の重要性についてたびたび言及されている。

4) さらなる問題として、日本文化関連科目が複数あって、その差別化が図られなけれならない点がある。参考までに筆者のケースをいうと、①「日本生活文化の理解」(第2学年1学期)、②「現代日本事情」(第2学年2学期)、③「メディア日本社会論」(第3学年1学期)、④「韓日比較文化」(第4学年1学期)、⑤「日本大衆文化フリートーキング」(第4学年2学期)と、これまでに合計5種類の講義の担当が課せられた。この内、①④⑤の講義では、ワークショップやPPTを用いた学生の発表などを通じて、学生の主体性に任せた教室運営を目指している。その他、韓国人の教員が担当する講義として、⑥「インターネット日本地理」(第2学年１学期)、⑦「人物日本史」(第2学年2学期)、⑧「日本文化論」(第3学年1学期)、⑨「韓日関係論」(第3学年2学期)が設置されている。

5) 同大同学科には、昼間コースと並んで夜間コースが設置されているため、当該講義については、2011、2012年度ともに、昼間の部、夜間の部と2クラスが開講された。「定員」が設けられているのは、あらかじめ割り当てられた教室のサイズによる。

の個人差も顕著なクラス構成であったといえる。

3. 講義の実践

3.1 講義計画(開講から中間テストまで)と講義目標

さて、前述の日本事情教育における3つの共通理解の内、①「前提認識」②「目的意識」については筆者も全く同意するとして、ここで、③「方法論」についての代案を提起してみたい。すなわち、狭義の日本語教育学分野からは少々外れた日本史分野の学識、そして、その根拠となる史料を活用した講義案である。

韓国の大学の日語日文学科に所属している近年の大学生たちは、ドラマ・アニメ・漫画・J-pop・ゲームなどの大衆文化を媒介に日本に触れた結果、日本語の勉強を始め、日本や日本人にも好意的になっているというのが圧倒的多数である。その反面、政治や歴史などの分野での専門的な議論に対しては必ずしも高い関心を示すわけではない。特に歴史については、「年数や事件の「暗記」だから興味が持てないし、大学受験を終えた今となってはあえて関わりたくない」「植民地時代の記憶に根ざした「反日感情」をどうしても想い起こしてしまうから避けたい」「韓日両国のあいだにある歴史認識のズレのせいで結局「政治問題」に発展してしまって難しい」といった意味でマイナス・イメージが強く、日語日文学科の若い大学生たちにはことさらに敬遠されている傾向が看取される6)。

だが、実は、「暗記」「反日感情」「政治問題」の3つは、そもそも歴史学の本質からは全くかけ離れた要素でしかない。「学問としての歴史」に触れれば、単なる「暗記」ではない歴史、すなわち国家・民族・社会の時間的変遷について考えることができる。現代の常識とは全く異なる過去の人間の認識のあり方を知ることができる。そして、そうした変遷に対する洞察を深めてゆくことで、「反日感情」に代表される敵国意識や自国・自民族中心主義(ethnocentrism)を客観視・相対化することができる。さらには、「政治問題」から離れて考え

6) 韓国の大学生たちの日本文化に対する意識に関して、朴・土屋(2002)、中川・神谷・李(2006)、三代(2012)などの調査が、今世紀に入ってから継続的に実施されている。だがここでは、そのような一般化された韓国人学生像についてではなく、実際に東義大学校の日語日文学科という現場で身近に学生たちと触れ合う立場にいる筆者の実感について述べている。なお、「敬遠されている」と述べたが、これは「意欲がない」ためというよりも、多分に、日本人と歴史について語り合うにあたって「有効な手段がわからない」ためであるように感じられた。

なければ「正しい歴史認識」が成り立たない場合もあるということを理解できるようになる。

若い韓国人日本語学習者たちの歴史及び歴史学に対する偏見を取り払い、彼らがより深いレベルでの議論ができる人材となるように導くためには、日本の大学で歴史を専攻した人間による働きかけが不可欠であり、それは大変重要なことだと考えられる。そこで、本「メディア日本社会論」講義では、あえて、「講師が自己の知識を一方的に伝達する講義スタイル」をとってみることにしたのである7)。

本稿では、当該講義の中間テストまでの前半部分を取り扱うが、それは以下の計画に沿って進められた(カッコ内、*以下は各回の講義における使用メディア)。

第1回「ガイダンス」
第2回「導入~バンクーバー・オリンピック報道にみる日本社会」
(*スポーツ新聞・ニュース映像・競技映像・テレビコマーシャル映像)
第3回「江戸から明治」　(*木版印刷物　　ex浮世絵・絵草紙・黄表紙・読売・物の本)
第4回「新聞の誕生」　　(*木版印刷物 → 活版印刷物)
第5回「国語という思想」(*変体仮名 → 1音1字制度確立後の小学校国語教科書)
第6回「広告の発生」　　(*明治・大正期の新聞広告と街頭ポスター)
→ ここで中間テスト。これ以後、期末テストまでは「街頭テレビの登場」「新聞・テレビの信用低下問題」「ネット用語の基礎知識」「ネット炎上事件」など、戦後~現在のメディア史からトピックを選び、各種の視聴覚メディアを使用して講義。

「メディア日本社会論」という名の講義の前半部で用いる素材として、江戸時代の「木版印刷」や明治以後のメディアの発達史からトピックが選ばれている理由には、筆者が自分自身の専門性を発揮したいためという個人的都合もあった。だが、それよりもむしろ、日本語教育学分野においても広く共感されている2つの基本理念、すなわち「日本文化に限らず、文化は固定的ではなく流動的だという前提認識」、及び「ステレオタイプや既成概念にとらわれずに、日本とは何かということについて冷静かつ柔軟に考えることのできる学生を養成したいという目的意識」に依拠したからである。

もちろん、それは歴史学の専門家たちのあいだでも広く共有されている基本理念であ

7) もちろん筆者は、「主体性をもった個々の学生の活動に重きをおいた教室運営」など無意味だという持論をもっているのではなく、また、「学生の活動」と比較して「講師が自己の知識を一方的に伝達する講義」の方が有益だと主張したいのでもない。後述するように、一方向的な講義の内にも「学生の活動」を取り入れて、学生の主体的関心を呼び起こすための工夫をしている。

る。かくして、具体的な史料を根拠に、「近世以前、身分階層的にも地域的にも鋭く対立し、大きく分裂していた人々が、明治維新以後に整備されたさまざまなメディアを通じて同じ情報を共有できるようになってから、はじめて「日本人」としての統合が可能になった」という歴史的変化の過程を描き出し、学生たちに示すことが、本講義「メディア日本社会論」前半部の講義目標として設定された8)。

各回の講義における使用テキストは、有山・竹山(2004)、土屋(2002)、イ(1996)、北田(2008)などの日本語文献から引用し、プリントしたものである。専門書の内容を外国人学習者向けに簡略な表現に改め、ふりがなを補うなど適宜改編して作成した。聴講学生には次週講義予定分をあらかじめ配布し、毎週の講義には予習した上で臨んでもらった。

紙幅の都合上、本章では、上記の第3・4・5回講義で扱った内容を史料の一部とともに紹介する。第3回「江戸から明治」では、「錦絵(にしきえ：多色刷浮世絵版画)」画像を、第4回「新聞の誕生」では明治初期に発行された新聞画像を、第5回「国語の誕生」では1900年以後1音1字に統一される以前のひらがな(＝変体仮名)画像を、それぞれスクリーン上に映した。第4・5回講義においては、まずグループを作り、学生たち自身に「それが何であるのか」について考えさせた上で、思いついたアイデアを自由に発言・発表してもらう時間をとった。

その後で、以下に示すような、筆者による日本語での【解説】を聞かせた9)。もちろん、聴講者の全員が外国人学習者であることを考慮して、用いる単語や表現はできるだけ簡略なものに、話すスピードは極力ゆっくりと、そして時々話すのを止めて学生からの質問も受けつつ、学生が理解できているのかを確認しながらの説明に心がけた。

3.2 講義内容1　―第3回『江戸から明治』―

日本文化、いわゆるジャポニズムの象徴であり、世界の美術史にも大きな影響を与えたのが江戸時代の日本で独自の発展を遂げた「浮世絵」である。現存している「浮世絵」は現在ではどれも貴重な芸術作品、あるいは文化遺品とみなされており、当然値段も高い。とこ

8) 出版資本主義の形成が近代国民国家成立の前提として重要であったという理解については、Anderson(1983)を参照のこと。これは、ナショナリズム研究における古典的理解の１つとして著名なものである。

9) この【解説】は、有山・竹山(2004)、土屋(2002)、イ(1996)などの専門書の内容を参考にしつつ再構成したものであって、筆者自身の歴史研究に基づく創見ではない。本稿にも創見があるとすれば、日本の歴史学研究ですでに定説となっている内容を、韓国人学生に対していかに面白く、わかりやすく伝えるかという教授法にある。

ろが、実は「浮世絵」が作成された当時において、そのほとんどは貴重な芸術作品とは思われておらず、安価で庶民的なものだった。なぜなら、現存する「浮世絵」の多くは、1枚絵を基にした印刷物(コピー)であり、江戸時代には大量に生産され、また大量に流通していたからである。

まず、以上のような話をした後、江戸期に生産された「木版印刷」の画像を、有名・無名のものをあわせて十数点ほどスクリーン上で紹介した。以下はその一例である。

左〈図1〉　歌川広重作『東海道五十三次　由比宿』(保永堂版1833~1834年)
右〈図2〉　喜多川歌麿作『当時三美人』(1793年)

【解説】江戸時代の日本では、版画つまり「木版印刷」が盛んにおこなわれていた。多色刷りの版画、つまりカラー・コピーのことを特に「錦絵」と言い、庶民が生活の中で普通に使用していた。例えば、左は、現在の静岡県静岡市から見た富士山の風景画であり、右は、当時江戸の町で美人と評判だった実在の3人の女性たち(富本【豊ひな】・難波屋【きた】・高島屋【ひさ】)を描いた人物画である。歌川広重・喜多川歌麿という有名な画家が書いた写生画を元に、これらの図案は版画職人たちによって印刷物として大量に複製され、一般庶民も安価で購入することができた。現代でいえば、左は風景写真をモチーフとしたポスター、右はアイドルのグラビアと同じようなものであったとされている。

もちろん、モノクロの印刷物もあり、「絵草紙」(えぞうし：現代の挿絵入小説)、「黄表紙」(きびょうし：現代の漫画)、「読売」(現代の新聞号外)などが流通していた。「春画」(しゅん

が：現代のポルノ・グラフィ)も大量に存在した。これら印刷物の「企画→生産(脚本・作画・印刷)→販売 / 貸本」という一連の流れは出版ビジネスとして確立しており、事業者によって消費者である町の人々の嗜好がリサーチされ、「これはウケるはず、売れる(＝利益を生む)はず」と判断されたものが作られた。そうして、次々と新たな流行作家や流行作品があらわれては消え、また「多色刷浮世絵版画」の技術も独自の発展を遂げたのである。江戸の人々は娯楽品として多種多様な印刷物を受容し、愛好していた。このような出版文化は、現代と比較しても同じような基本構造をもっていたといえる。

ただし、江戸時代と現代の出版文化では、以下に挙げるような本質的な違いも存在した。第1に、大都市のみで生産可能であり、地方では珍しかったこと。第2に、多分に町人の文化であり、知識階層である武士たちや文字の読めない農民・漁民たちの嗜好にあわせて企画・生産されたものではなかったこと。第3に、政治報道や体制批判は厳禁で、風俗を乱すとされたものは発禁処分を受けるなど禁止事項が多数存在したこと──などである。

また、同じ「木版印刷」のなかに「物の本」(もののほん：現代の政治研究書、思想書)と呼ばれる書物があった。これは全文漢文で書かれており、当時の知識人たち、つまり武士階層の人々に読まれた。都市で暮らす商人たちも、帳簿をつける必要から仮名文字を学習していたためにそれなりの識字力はあったのだが、漢字・漢語のみで書かれた「物の本」は難しく、ほとんど読解不可能だった。仮に読めたとしても、その内容は、当時、政治から完全に疎外されていた庶民の興味からはあまりにもかけ離れたものであっただろう。

以上概観した通り、日本では、江戸時代の時点においてすでに、印刷物を媒介にした情報の共有がある程度は実現していたのだ。だが、①大都市と各地方の間の地域的断絶、②武士(知識人階層)と商人(識字階層)と農民・漁民(文盲階層)の間の階層的断絶という、2つの異なるレベルの断絶があった。文字媒体を通じて同じ情報を共有できない人々は大きく分裂しており、現代のように「日本人」全体を統合することは不可能だった。

3.3 講義内容2　―第4回『新聞の誕生』―

明治初年に西洋の文物である新聞が伝わる。西洋の新聞は「活版印刷」で作られていたため、日本の新聞にも「活字」が導入されることになった。そもそも、毎日作って配らねばならない新聞は速報が命であるため、まず版木を作り、刷るのにも時間がかかる「木版印刷」には向いていない。その結果、「木版印刷→活版印刷」という技術の転換が起きることになる[10)]。

以上のような話をした後に、学生たちに次に掲げる画像をみせて(スクリーンに映しつつ、グループごとにカラー・コピーも配布)、以下2つの質問をおこなった。

問題1　　下の画像は何でしょう？　(ヒント：右上「報知〇〇」)

問題2　　下の画像はどういう場面を描いたものでしょう？

<図 3>『郵便報知新聞』第532号[11)]

10) 日本最初の日刊新聞『横浜毎日新聞』の創刊は1871(明治4)年のこと。「活版印刷」そのものはすでに戦国時代末期に西欧・朝鮮半島から伝わっていたのだが、本文で後述する理由によって、江戸時代の日本ではほとんど活用されなかった。すでに見たように、江戸時代においては「木版印刷」が発展していた。

11) 画像引用元：東京都立中央図書館特別文庫室貴重資料画像データベース
http://metro.tokyo.opac.jp/tml/tpic/

解答1　新聞(正確には「新聞錦絵・錦絵新聞」)

解答2　川越に住む【相沢伊兵衛】の娘【なつ】(16)が、母親違いの2人の兄である【広吉】と【長四郎】によって、裸にされて川に捨てられていたのを、たまたま通りかかった警察官が救出した。この話を聞いた者は皆、兄たちの残酷さに憤ったが、実は、【なつ】は子供のころから手癖が悪く、盗みばかりして親の言うことを全然聞かないので、親や兄たちは「この子を生かしておいたらお上の迷惑になる」と思いつめ、【なつ】の殺害を計画、実行したのだった。しかし、そのやり方はやはりよくないということで、親と兄は相当の罰を受けた、ということだ。

【解説】　明治初期のきわめて短い一時期(明治7~14年頃)に、江戸時代以来の伝統的「木版印刷」の技術を応用した新聞(「新聞錦絵」または「錦絵新聞」)が作成された。「錦絵」ということで1枚絵ではなく、大量に、しかもカラーでの複写が可能だった。このような「新聞錦絵」はなぜ生産されたのだろうか。それは、明治初期の新聞が欧米諸国のジャーナリズムに学んだ結果生まれたもので、新聞を発行する新聞社は民間の事業として、自分たちのビジネスを何としてでも成功させねばならなかったからである。

生まれたばかりの新聞は「活版印刷」で作られたが、難しい漢字や単語が多く、一般庶民の関心を集めるものとはいえなかった。庶民に受け入れられなければ新聞は売れず、新聞が売れなければ新聞社は経営破綻してしまう。新聞社が成功せずジャーナリズムが定着しないと、庶民が自国の政治に関心を持たない江戸時代と同じ状況のままである。それでは西欧諸国でおこなわれている国民国家が実現せず、彼らに対抗できなければ、日本が植民地とされてしまう危険がある。つまり、西欧諸国のような独立の国民国家を作るためには、絶対に、新聞社のビジネスが成功しなければならないと考えられたのだ。

では、どうしたら新聞が売れるようになるのか。そのためにはまず、「新聞に書かれていることは面白い」ということを庶民に向けてわかりやすく宣伝する必要があった。「面白い」のなら庶民は金を出して買ってでも読みたくなる。そこで、新聞記事の中でも、殺人・醜聞・美談・怪談のような庶民受けする題材が選ばれ、文章に「ふりがな」を補って読みやすくし、庶民にも馴染みの「錦絵」――しかも刺激的で扇情的なもの――をつけ、新聞販売を促進するための広告として配布したのである。

というわけで、今見た川越の【相沢なつ】にまつわる殺人未遂事件は、昔の日本で実際に起きたということが知られる。さらに、そうした事件報道がすでに明治初年当時におい

てなされていたこと、また、誕生間もない日本の新聞社が、こうした市井の取るに足らない事件をネタに発行部数の増加をはかるイエロー・ジャーナリズムの手法を取り入れていたこともわかるだろう。「新聞錦絵」とは、江戸以来の伝統文化と明治以後受容された西洋文化が合流した結果生まれた過渡期の産物であったのだ。

こうした新聞社の経営努力のおかげもあって、明治初年に誕生した新聞は徐々に日本社会に定着していった。新聞はこの後現在まで、毎日途切れることなく発行され続けている。他方、江戸以来の「木版印刷」は、やがて写真の印刷を可能とする新技術(写真網目版・リトグラフ)が導入されたことによって、製本や報道といった本来の機能を失って衰退する。そしてその後は、かろうじて「伝統芸術」としての再生がはかられてゆくのである。

3.4 講義内容3　―第5回「国語という思想」―

創刊当時の新聞には、「ひらがな」ばかりではなくたくさんの漢字が印刷されており、難しいことば＝概念であふれていた。そのため、一部の知識人を除いた庶民には難しく、面白くもないものだった。そもそも、江戸時代において、人々は地方ごとに分裂し、また同じ地方の内部でも上級武士・下級武士・商人・農民といった階層ごとに分裂していて、どの地方のどの身分の人間でも理解できるような共通語などなかった。それが明治時代になると、国民国家の必要を自覚する知識人たちによって、国民言語(National Language)のあるべき姿が真剣に模索されるようになる。そんな中、全国に小学校が作られて、学校教育が始まることになった[12)]。

以上のような話の後に、学生には次ページに例示するような看板の写真を数点見せて(スクリーンに映しつつ、各自にプリントを配布)、クイズを出した。

12) 日刊新聞創始の翌年である1872(明治5)年に発布された「学制」に基づいて、全国各地に小学校が整備されることになる。そして、早くも1875(明治8)年には、現在とほぼ同じ数の約24000の小学校が建ったとされる。

問題　　次の2つの看板の「ひらがな」を読んでください。

左の画像「御○○処」　　右の画像「一品料理　鍋物　○○○」

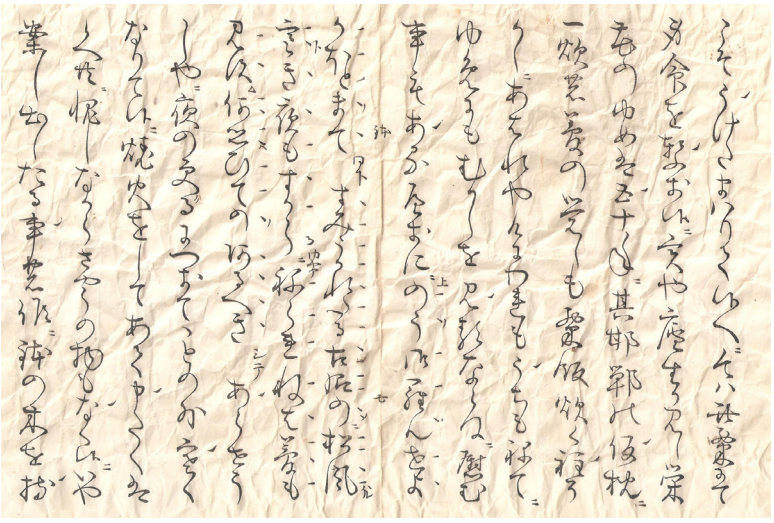
<図 4･5>「変体仮名の看板」[13)]

解答　　左の画像「そば」　　右の画像「あすか」

【解説】　「ひらがな」は、万葉仮名から派生した音節文字で、読みは「字母」となる漢字の字音か字訓、字体は「字母」漢字の草書体をさらに崩したものである。1つの「ひらがな」の字体には、「字母」が異なるもの(ex「曽波―楚者」「安―阿」「加―可」)と「字母」は同じだが崩し方が異なるもの(ex「寸―す」)の2種類があり、本来1つの音について何種類もの字体が存在していた。「ひらがな」は、このような異体字を持つ文字体系として、平安時代が終わる12世紀にはほぼ完成していたとされる。

江戸時代の庶民が生活上で使用していたのも、1つの音について多くの字体がある「ひらがな」だった。当時の人々は筆で文字を書いていたため、上から下へと複数の文字を一画で書き連ねる都合上、1文字1文字を独立させる必要がなく、また、同じ音の文字が複数あった方が書き分けるのに便利で、それが美的効果を生みだすと考えられていたのである。「毛筆字」をもとに作成される「木版印刷」もその点は同様である。

13) 画像引用元：FC2ブログ「日本語で書いている」2008年3月記事
http://kurojikanbandesu.blog102.fc2.com/blog-category-2.html



〈図 6〉「木版印刷」による江戸時代の文字(謡曲『鉢の木』の一節)

①「毛筆字」をベースに印刷。②文字のサイズがバラバラ。③1文字が独立していない。
④「ひらがな」が多い。以上、近代以後の「活字」とは概念が全く異なることを確認。

明治初年、小学校が設置された当初においても、「ひらがな」の字体は複数のものが教えられていた。だが、1900(明治33)年の小学校令改正を受けた小学校施行規則において、小学校で教える「ひらがな」の字体は1音について1字体と統一される。そして、その後の学校教育においては、一貫して、1音につき1字のみが教えられることとなり、現在に至っている。そもそも明治以後導入された「活版印刷」では、「活字」の種類が少ない方が経済的かつ効率的であろう。「ひらがな」が1音1字になることは明治期の出版業者には非常に合理的だったのだ。そのため、新聞や雑誌などの活字メディアでも、街に貼り出される看板や広告でも、人々が学校で教わる「国語」のみが用いられることになる。

こうして、学校教育とマス・メディアによって日本社会にあまねく「国語」の文字が浸透してゆく。日本で暮らす人々はこの「国語」を通じて同じ情報を共有できるようになったのであり、そうなってはじめて、地域と身分の差を越えた「日本人」としての一体感も実感されるようになったのだ。しかし、このことは同時に、人々が学校で教わらない文字を読めなくなることでもあった。漢字も「国語」として採用されなかったものが数多い。つまり、「国語」が定着したせいで、近代以後の「日本人」たちはそれ以前の文字や文章が読めなくな

り、その結果、過去のことがほとんどわからず、過去の人々の生活実感に共感することも難しくなってしまったのである。

最後に、1900(明治33)年という年数に注目ておきたい。すると、「国語」とは、日清戦争の結果、1895(明治28)年に日本が台湾を領有した直後の時点で誕生したものだったことがわかる。つまり、「ひらがな」が1音1字に合理化されるなど日本語が簡略化した背景には、「国語」という教科が内地の「日本人」のみならず、台湾の人々にも教えられるべきものとして想定されたという事情があった。そして1910(明治43)年以後において、「国語」は朝鮮半島の学校でも導入されてゆくことになる。日本における「国語」とは、植民地を含む「帝国日本」の全体を統合したいという目論見から作り出されたものであったのだ。

4. 学生の反応

4.1 講義の効用

以上の講義方法の効用について、まずは、日本語教育を実践する教室運営上において有益と考えられるポイントについて、4点にまとめてみよう。

(1) 聴講者全員が初見の素材を用いるため、日本体験の有無や日本語の実力差には関係なく、「全員わからない」という意味で対等で、不平等感が出ない。
(2) 見た目にインパクトがあり、教室全体が騒然となるため、日本語聴解能力に関係なく、出席学生のほぼ全員が講義内容に無関心ではいられなくなる状況が期待できる。
(3) 見た目の印象から個々の学生ごとにさまざまな想像が生まれる余地があり、学生間での比較的活発な意見交換と発話が期待できる。
(4) 学生間の意見交換だけでは結局正解が判明しないため、最終的に、日本人講師の日本語による解説を集中して聞かざるを得ない状況が期待できる。

ねらい通りの効用はあったのだろうか？　一例として、あるクラスで第4回の「新聞錦絵」に対する回答を話し合い、クラス全体で意見交換した時のやりとりを紹介する。

「これは夫婦喧嘩をして、夫が妻を殺したところです」
「いいえ。この男は変態で犯罪者でした。女の子はかわいそうでした」
「それは違う。この男女はカップルで、2人とも変態だ」
「いやいや、もっとよく絵を見てください。岩のところに釣り竿がある。えーと、男が海で魚を釣っていたら人魚が引っかかりました」
「あ、惜しい。男が釣りをしていたのは間違いないけど、女の子を生贄にしてクジラを狙いました。日本の田舎にある宗教行事です。私は聞いたことがあります」

このような珍回答が続出し、大爆笑を生んでいた。質問に対する回答をグループで考えてもらうことで、自分の考えを日本語で表現する機会―何とか正解したい真面目な学生がいる一方、何とか皆の笑いを取りたいひょうきんな学生もいる―となり、また、他の学生の日本語での発言を聞く機会ともなる。講義に集中しながらも教室全体に笑いがあふれる、大変リラックスした空間が実現していたように思われる。

ところで、「新聞錦絵」には文字も印刷されているため、文章さえ読解できれば、それがどういう場面なのかがわかったはずであろう。しかし、もちろん明治初年の「木版印刷」で記された日本語文は外国人には難解であり、ほぼ読解不能なものだ。つまり、筆者はここで、学生たちに自力で正解を出してもらいたかったのではない。むしろ、「画像には間違いなく「日本語」が書いてあるのに、そして自分たちは「日本語」を勉強しているはずなのに、しかも「ふりがな」までついているのに……皆で頑張ってみても「新聞」が全然読めない」という事実に気づいて愕然としてもらいたかったのである。第5回の「ひらがなの看板」についても同様で、まず、「これが「ひらがな」だなんてウソだ。信じられない！……それにしても、一体、なんて読むのだろう？」と思ってもらいたかったのである。

そうして学生たちの興味関心を引きつけられたなら、きっと「これが何であるのかどうしても知りたい」と思わせることにも成功したはずだろう。個々の学生のそうした思いは、日本人講師の日本語による解説を集中して聞かねばならないという心理を呼び起こし、アカデミックな日本語を聴解するためのよい練習機会になったと考えられる。

それでは引き続いて、本講義において筆者が学生たちに提示した、日本文化の「史的変遷」にまつわる理念について述べることにしよう。

4.2 講義の理念―「史的変遷」に着眼した日本文化講義の意義とは？―

現在の日本ではあまりにも当たり前な「国語」。そしてこの「国語」こそ、外国語としての

「日本語」の基礎である以上、外国人日本語学習者にとっても同様に、あまりにも当たり前なものといえる。だが、実は「国語」の歴史はたかだか110年ほどしかないのであり、それ以前の1000年以上の間、日本語は現在の「国語」とはかなり異質のものであった。「国語」が今のような形で整理されるに至った変遷の要因としては、当然、国民統合・植民地経営といった政治的イデオロギーのためという側面を挙げなければならないだろう。だが実は、本講義で紹介したような「木版印刷(毛筆字)→活版印刷(活字)」という技術転換のためという側面も無視できないわけである。

こうして誕生した「国語」を通じて、現代の「日本人」たちは強力に統合され、出身地域や出身階層の垣根を超越した一体感を得られるようになった。だが、その反面、学校で日本の「国語」を学習しない他国・他地域の人々とは、依然、共通の言語を通じたコミュニケーションがとれずに分裂したままなのであり、共感・同情を得ることは難しい。さらに、「国語」として採用されなかった昔の文字と文章が読めなくなった結果、現代の「日本人」たちは自分たちの先祖とも大きく分裂し、共感・同情を得ることができなくなってしまったのだ[14)]。

さて、このような歴史的考察は大変面白く、そして非常に重要なものである。にもかかわらず、日本における常識とはいえないだろうし、韓国の大学で勤務する日本人講師ならば当然知っていなければならない基礎教養とも認められない。なぜなら、むかしの「ひらがな」と同じように、こうした史実が学校教育で教えられることはないからである。そして、マス・メディアが大々的に取り扱うようなこともないからである。日本に限らず、国家というものは、学校教育やマス・メディアを利用して既成概念を作り出している。そのために、むかしの「ひらがな」と同じように、国家が採用しなかった「歴史」は読まれなくなって人々からどんどん忘れ去られ、まるで意味がないもののように錯覚されてしまうのだ。

日本という国民国家においてそうであるのならば、当然、韓国という国民国家においても同様の現象が起きる。筆者が、本講義において日本の「文化史」から素材を選んで講義してみたのは、日本にせよ、韓国にせよ、国家の存立を前提にした見方からは、読めなくなる・見えなくなる・わからなくなることが、本当に、たくさんあるのだという事実について、若い韓国人学生の中でも、特に日語日文学科に籍をおく学生たちには、もっと真剣に

14)　講義中、江戸時代の知識人である武士を朝鮮時代の양반(両班)と対比させつつ、韓国史と日本史を素材とした比較文化論的解説もおこなっている。韓国においても、朝鮮時代において歴然と存在していたはずの上下間、各地域間の断絶は、국어の成立と学校教育の開始を契機として消失していったのであり、他方、この국어の定着によって、現代と過去との断絶が決定的になったということである。

考えてほしいという思いがあったからである。「国家によって教育される歴史」と「歴史家が研究すべき歴史」が実は全然違っているのだという事実について、わかりやすい具体的根拠をもとに気づいてもらう。この「気づき」によって、学生個々人は、韓国の学校教育やマス・メディアによって形作られるステレオタイプや既成概念を客観視・相対化することができるようになるだろう。

そして、そのような既成概念の客観視・相対化こそ、日語日文学科の韓国人学生が、同世代の日本人の若者や、日本語・日本文化を学んでいない周囲の韓国人たちに対して、きちんとした自説を展開する際の拠り所として活用するべきものなのである。やがて社会に出て行く日語日文学科の学生の1人でも多くが、これまで紆余曲折を経て変化してきた、そしておそらくは、これからも時々刻々と変化してゆくだろう日本と日本人について、柔軟かつ冷静な判断を下すことのできる韓国市民となってくれること。さらには、国際化・グローバル化の進む現在の韓国社会において、日本語と日本文化を学んだ自らの存在価値をきちんと表明できる人材となってくれることを、筆者は心から願っているのである。

それでは、このような歴史素材を用いた講義によって、「日本についてのステレオタイプや既成概念にとらわれずに、日本とは何かということについて冷静かつ柔軟に考えることのできる学生を養成する」という、本講義の所期の大目的は達成できたのだろうか？　教室の雰囲気のような感覚的な反応ではなく、学生たちの論理的な反応の方を、いよいよ確認してみたいところだ。

4.3 中間テスト答案例

「メディア日本社会論」講義の前半を踏まえて、中間テストでは、学生に日本語での小論文作成を課した(問題：近代以後(1868年~)の日本で、それまでバラバラだった人々を「日本人」というかたちに1つにまとめてゆく過程で、もっとも威力を発揮したものは何だと考えますか？　そのものを1つ取りあげ、あなたがそのように考えた理由を説明してください)。これに対する答案例を3点紹介する。なお、以下の答案例は、細かな日本語のミスについては引用者(鈴木)が適宜修正しているものの、ほとんど原文に近いものであり、論旨については全く学生本人のものであることを記しておく。また、傍線部は、講義では特に触れなかったポイントであり、学生が自分自身で考え出した部分と認定できる。

(答案例1) もっとも威力を発揮したのは「国語＝標準語」だと思います。それは、その前までは地方ごと、身分ごとに、さまざまな形で分裂していた日本人を新しい言語体系(国民的コミュニケーション)で統合したからです。
「日本語はすべての外国語をカタカナで表記するので国際性が欠如している」とネガティブなことを言う人がいますが、それは逆に考えてみると、日本語のように1つの国と1つの国語が深く関わっているのは非常に珍しい、ということになります。そして、その国語はまた、日本人を統合する一番強力なメディアとして機能するのです。メディアというと、新聞や、絵画や伝統文化などがパッと思い浮かびます。が、新聞だけで、伝統文化だけで、国民が本当に統合できるとは言い切れません。
新聞はそれを読んだ皆が理解できる時にはじめてメディアとしての価値が高まりますし、伝統文化ならばなおさらです。まず、同じ言語を共有する公平性が先立たなければならないので、一番威力を発揮したのは「国語＝標準語」だと思いました。

(2011年度受講生：3年生女性、日本留学・就労経験なし)

(答案例2) 一番威力を発揮したのは「教育」だと思う。メディアとして、まず、音声は原始社会からあったが、それだけでは伝播力が弱かった。その後、文字や文書も発明されたが、上意下達の手段として用いられていた間は、文字を教えられなかった農民や商人を統合できなかった。この事情は、別に日本語だけではなく、英語やフランス語でも同じだろう。
江戸時代には、印刷技術が発達して、富裕な町人たちも印刷された本を読むようになったが、この時代は武士と農民と町人とでは使う言葉が違ったし、また、地域も分裂した状態だった。それが、明治時代以後に政治的に統一されて同じ日本になり、日本語も統一されたのである。上級武士、下級武士、農民、町人の階層の壁が消え、同じ1つの日本人になったのは日本語が「教育」を通して普及したからだ。教育がされなかったら、日本人たちはまだ中国の少数民族たちのようにバラバラなままで統合できなかったかもしれない。

(2011年度受講生：4年生男性、ワーキング・ホリデー制度による日本滞在経験あり)

(答案例3)「国語(標準語)」だと思う。去年日本の福岡にいたとき、私はいつも「なんで日本にはこんなに方言が多いのか」と思っていた。福岡から佐賀・大分・熊本はあまり遠くないのに、言葉はみな違った。私はその原因が「幕藩体制」にあると思った。
「幕藩体制」の時代は、藩ごとに支配者が違ったから政治体制も使う言葉も全部バラバラだった。しかし、明治政府が「国語(標準語)」というものを作って、小学校で教育させた。教育を受け、それまでバラバラだった各藩の人々は、地域と身分に関係なく、同じ日本人として統合されたのである。もちろん今も方言は残っているが、学校の授業や公式的なところでは標準語が使用される。

「もしその時、政府が国語を作らなかったら、今でも他の地域の人に会って話しても言葉が通じない、日本に住んでいる同じ日本人のはずなのに外国人のような気がするかもしれない」と思った。それで、「国語」を作って1つに統合させた政府の判断は正しかったと思った。

(2012年度受講生：4年生男性、日本の大学への交換留学経験あり)

以上3つの答案を書いたどの学生も、本講義を通じて新しく得た知見を、すでに自分がもっていた知識に総合することによって、自分なりの筋道を立てて論じる段階に至っており、独創性の高い考察を成し遂げたものと評価できるだろう。中間試験前までの講義全体の内容理解もよくなされており、日本文化の「史的変遷」にまつわる理念が伝わっていることも確認できる。紙幅に限りがあるため、ここではほんの一例のみの紹介しかできないのであるが、彼らの他にも、自分自身の論述をすることに成功した学生が数多く現れた。

他方、講義に登場した話をそのまま繰り返すのみで、自分なりの立論をおこなう段階には至っていない答案も多かった。また、問題を取り違えて完全な自由作文をしてしまった学生も各クラスに数名ずつあらわれた15)。そのため、中間テスト直後の講義時間において、上掲の答案例をプリントして学生に配布し、本講義の前半部の流れを確認しつつ、他人の考えのコピーではない自分なりの意見を論じるというのはどういうことなのかについて、じっくりと考え直す機会にしてもらった。

5. おわりに

筆者の勤務校で日本語や日本文学、そして日本文化を専攻する韓国人学生たちは、それぞれの理由で日本語や日本文化に関心を持っているものの、彼らの多くは、将来実際に日本で長期の生活をすることになるわけではない。仮に、留学したりワーキング・ホリデーを取得したりして日本で生活することになったとしても、1年ないし2年といった活動期間を経てほとんど帰国する。大学などの機関で日本学専門の研究者となる、日系企業に就職する、日本人配偶者を得て日本で生活するというような事例は極少である。彼らが日常生活で触れあうのも、その多くは日本人ではなく韓国人であろう。となれば、学生たちは大

15)「近代以前においてはバラバラだった日本人を1つにまとめたものは何か」という問題に対する回答として、「富士山」「桜」「津波」「坂本龍馬」などをとりあげて、本講義の趣旨とは全く外れた議論をしてしまっていた。これは講義の内容がわからなかったというよりも、試験の出題意図を間違って理解したものと推察される。

学を卒業してしまうと直接的に日本や日本人と関わる場面は限られ、メディアを介して間接的に関わる場面がほとんどになる。つまり、筆者の勤務校のような韓国の大学教育現場で大切なのは、個々の学生における、日本に関してのメディア・リテラシー養成なのだ。

昨今、「韓流ブーム」の影響が著しい日本では、韓国の大衆文化コンテンツが盛んに消費されているが、それ以前より日本文化開放政策を受けている韓国では、さまざまな日本の大衆文化コンテンツが視聴できるようになっている(朴・土屋2002)。だが、先述したように、日本の大衆文化コンテンツをただ娯楽のために消費している韓国の若者たちには、政治問題や歴史問題に対する拒絶反応がしばしばみられる。そして彼らは、日本の若者たちとの間でこうした問題について語り合うことを避けるのみならず、実は、韓国の若者たちとの間でも、そういう話題での真剣な話し合いを回避してしまっているのだ。そういった必ずしも「知日派」でない「親日派」の増加は、逆説的ながら、韓国社会における「反日」思潮を強化する遠因となってしまう可能性が高い。これは、数年以前より「韓流ブーム」が席巻していたはずの2013年現在の日本社会における「嫌韓」思潮の高まりのメカニズムをみれば容易に想像されよう(安田2012)。

したがって、韓国の大学に勤務している日本人の講師は、その役割を単なる日本語教育に自己限定すべきではないと考える。韓国社会において「反日」思潮が沸騰しないよう、韓国市民社会の理性維持に少しでも貢献することは、在韓日本人講師たちの使命といっても決して過言ではないように思う。国際交流と同時に学際交流の進む今日、さまざまな経歴を持つ日本人が韓国の大学で勤務するようになっている。そういう日本人たちは、自身の経歴に基づいてさまざまな角度から、韓国人日本語学習者の日本に対する理解の深化に助力するべきであろう。それで筆者の場合は、自身の専門である近代日本思想史の学知を応用した講義を実践してみたのである。

以上に述べたような理念の公識化に、本稿が少しでも役立つものとなったら幸いである。

＊　　＊

なお、本講義「メディア日本社会論」では、中間テスト明けの後半部において、第2次大戦後現在に至るまでの日本メディア史上のトピックを取りあげたのだが、その内容については、また機会をあらためて報告させていただきたいと思う。

【参考文献】

Benedict Anderson(1983) Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism.(白石隆・白石さや訳(1987)『想像の共同体―ナショナリズムの起源と流行―』リブロポート、윤형숙역(2002)『상상의 공동체―민속주의의 기원과 전파에 대한 성찰―』나남)

有山輝雄・竹山昭子編(2004)『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社

イ・ヨンスク(1996)『「国語」という思想』岩波書店

北田暁大(2008)『広告の誕生―近代メディア文化の歴史社会学―』講談社学術文庫

佐藤勢紀子(1996)「「日本事情」覚書―ウチ・ソト意識を中心に―」『放送教育開発センター研究紀要』第13号、pp.193-207

土屋礼子(2002)『大衆紙の源流―明治期小新聞の研究―』世界思想社

中川かず子・神谷順子・李俊鎬(2006)「韓国における日本語学習者の日本と日本文化に対する意識(1)―大学の日本語専攻・非専攻生に対する調査から―」『北海学園大学人文論集』第35号、pp.41-69

朴順愛・土屋礼子(2002)『日本大衆文化と日韓関係―韓国若者の日本イメージ―』三元社

細川英雄編著(1999)『日本語教育と日本事情―異文化を超える―』明石書店

細川英雄(2011)「日本語教育は日本語能力を育成するためにあるのか―能力育成から人材育成へ・言語教育とアイデンティティを考える立場から―」『早稲田日本語教育学』第9号、pp.21-25

水内宏・李潤華(2006)「「日本事情」教育における新視点と教材開発」『千葉大学教育学部研究紀要』第54巻、pp.55-62

三代純平(2012)「韓国の大学における日本文化に関する授業の現状―中国・上海の大学との比較から―」『徳山大学論叢』第74号、pp.109-127

安田浩一(2012)『ネットと愛国―在特会の「闇」を追いかけて―』講談社

논문투고일 : 2013년 06월 10일
심사개시일 : 2013년 06월 20일
1차 수정일 : 2013년 07월 09일
2차 수정일 : 2013년 07월 16일
게재확정일 : 2013년 07월 21일

〈要旨〉

韓国の大学における歴史素材を活用した日本文化講義の意義

本稿は、2011・2012年度第1学期に東義大学校日語日文学科でおこなわれた「メディア日本社会論」という講義の実践を基にした試論である。本講義において、筆者は、自身の専門である歴史学分野(近代日本思想史)の学識を踏まえて、歴史的素材を用いた日本文化講義を実践した。具体的には、江戸時代に作成された浮世絵、明治時代に作成された新聞錦絵、変体仮名で書かれた看板を活用した。この講義方法がどのような効果をもたらしたかについて、本論文では、聴講学生たちが書いた小論文をもとに分析を加えた。

韓国の大学で日本人が日本の近代史を語るのは難しく、敬遠されることも多い。そうした現状に一石を投じるべく、本稿は最後に、歴史的素材を用いた講義が日語日文学科で学ぶ韓国人学生たちに大きな影響を及ぼし得ることについて提言した。

The Value of Lecturing on Japanese Culture at South Korean Universities Utilizing Historical Materials

This paper is based on lectures entitled “Studies of Japanese Society through Media” delivered at Tong-eui University in the first semester of 2011-2012. These lectures were a practice in teaching utilizing historical material. Media utilized herein include Ukiyoe(浮世絵) prints made in the Edo period, newspapers with Nishikie(錦絵) published in the Meiji period, and signboards written by the variant form of kanaletters. I analyzed the effects of this method of lecturing based on short essays written by students.

Many Japanese struggle to speak about modern Japanese history at South Korean universities, and in many cases it is avoided altogether. Therefore, with the intention of stirring discussion amid such circumstances, this paper identifies the potential impacts of this method on Korean students studying in departments of Japanese language and literature.